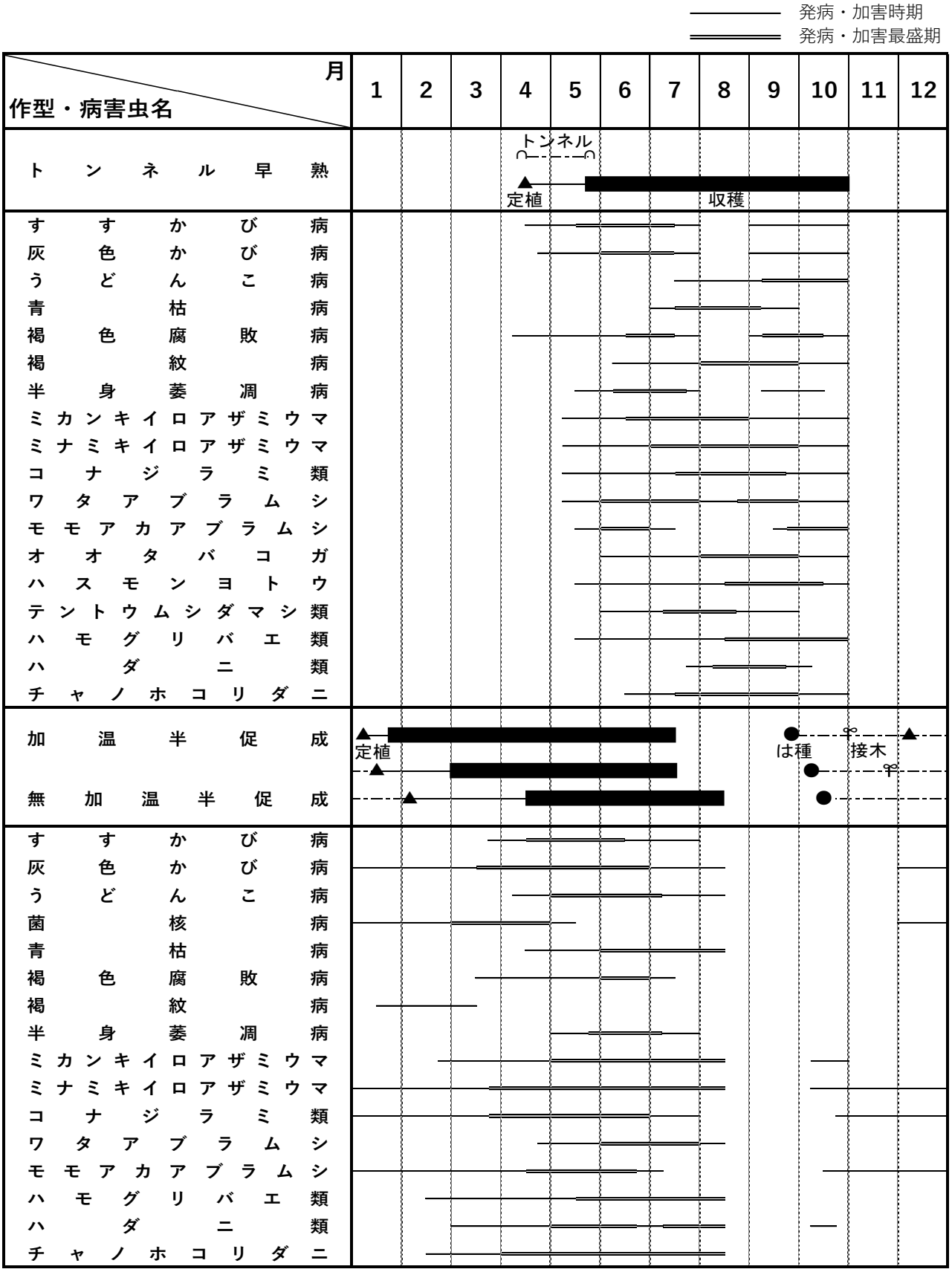
なす



注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

苗立枯病

留意事項

1 病原菌は、リゾクトニア菌、ピシウム菌などである。
2 オーソサイド水和剤80の成分キャプタンの総使用回数は5回以内（種子粉衣は1回以内）。

防除方法

1 床土は毎年更新する。
2 過湿にならないように、かん水量に注意する。
3 換気に努め、苗を強健に育てる。
4 発生後1～2日でまん延することがあるので、被害株は早めに除去し、ほ場外に持ち出し処分する。
5 は種前の種子に、下記のいずれかの薬剤を粉衣する。
・オーソサイド水和剤80 ＜Ｍ４＞【種子重量の0.2～0.4%　は種前／1回】
・リゾレックス水和剤 ＜１４＞
【苗立枯病（リゾクトニア菌）　種子重量の0.5%　は種時／1回】
6 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・オーソサイド水和剤80 ＜Ｍ４＞
【800倍　かん注（2L／㎡）　は種後から2～3葉期／5回】

すすかび病

留意事項

1 施設栽培での発生が多い。
2 中･下位葉の葉裏から発病しやすいので、注意して観察し、早期防除に努める。
3 病原菌は感染後潜伏期間が長いので、育苗中から防除を徹底する。
4 薬剤耐性菌が出現しやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
5 QoI剤≪１１≫、SDHI剤≪７≫は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。
6 アグロケア水和剤は、病原菌に感染する前に植物表面を成分の微生物で覆う仕組みから、植物が成長した部分には効果が及ばない。このため、病気が発生する前に一定間隔で散布する必要がある。

防除方法

1 被害葉は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
2 過湿にならないように管理する。
3 チッソ過多にならないような肥培管理に努める。
4 栽培終了後、施設を密閉し高温にして施設資材などに付着した病原菌を死滅

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

させる。

5 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。

・プロポーズ顆粒水和剤 ＜４０＞ ＜Ｍ５＞【1000倍　前日／4回】

・ベルクート水和剤 ＜Ｍ７＞【3000倍　前日／3回】

・アグロケア水和剤 ＜ＢＭ２＞【2000倍　前日／－】

6 発生を認めたら直ちに下記の薬剤を散布する。

・ファンタジスタ顆粒水和剤 ≪１１≫【2000倍　前日／3回】

・カナメフロアブル 劇 ≪７≫【4000倍　前日／4回】

・スコア顆粒水和剤 ＜３＞【2000倍　前日／3回】

7 施設内では、くん煙剤の使用も有効である。（Ⅻ省力安全防除　1くん煙（1）　参照）

灰色かび病

留意事項

1 低温多湿時に発生が多い。

2 薬剤耐性菌が出現しやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

3 ボトキラー水和剤は気温10℃以上で使用する。

4 ボトキラー水和剤は拮抗微生物を成分とする薬剤で、他剤との混用には注意が必要である。

5 ボトキラー水和剤は、暖房機ダクトが設置されている施設では、ダクト内投入による処理法も有効である。（Ⅻ省力安全防除　2ダクト内投入　参照）

6 QoI剤≪１１≫、SDHI剤≪７≫は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

1 施設内の換気を十分に行う。

2 敷わらまたはポリフィルムなどでマルチングを行う。

3 開花後の花弁をとり、病原菌の侵入を防ぐとともに、被害葉・果実を早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。

4 ほ場の排水を良くする。

5 チューブかん水や地中かん水を行う。

6 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。

・ベルクート水和剤 ＜Ｍ７＞【3000倍　前日／3回】

・セイビアーフロアブル20 ＜１２＞【1000～1500倍　前日／3回】

・ボトキラー水和剤 ＜ＢＭ２＞【野菜類　1000倍　発病前～発病初期／－】

7 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

・ゲッター水和剤 ＜１＞ ＜１０＞【1000～1500倍　前日／5回】

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

・ファンタジスタ顆粒水和剤 ≪１１≫【2000～3000倍　前日／3回】
・カナメフロアブル 劇 ≪７≫【4000倍　前日／4回】
・ピクシオDF ＜１７＞【2000倍　前日／4回】
8 施設内では、くん煙剤も有効である。（Ⅻ省力安全防除　1くん煙（1）　参照）

うどんこ病

留意事項

1 高温乾燥時に発生が多い。
2 薬剤耐性菌が出現しやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
3 ボトキラー水和剤は気温10℃以上で使用する。
4 ボトキラー水和剤は拮抗微生物を成分とする薬剤で、他剤との混用には注意が必要である。
5 ボトキラー水和剤は、暖房機ダクトが設置されている施設では、ダクト内投入による処理法も有効である。（Ⅻ省力安全防除　2ダクト内投入　参照）
6 SDHI剤≪７≫は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

1 チッソ過多を避ける。
2 施設栽培では適度のかん水を行い、過乾を避ける。特に温風暖房を行うところでは注意する。
3 被害葉は早めに除去し、ほ場外に持ち出し処分する。
4 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
・ベルクート水和剤 ＜Ｍ７＞【3000倍　前日／3回】
・フルピカフロアブル ＜９＞【2000～3000倍　前日／4回】
・ミギワ10フロアブル ＜５２＞【1000倍　前日／3回】
・プロブラッド液剤 ＜－＞【野菜類　400～600倍　発病前～発病初期／－】
・ボトキラー水和剤 ＜ＢＭ２＞ 【野菜類　1000倍　発病前～発病初期／－】
5 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・パンチョTF顆粒水和剤 ＜Ｕ６＞ ＜３＞【2000倍　前日／2回】
・パルミノ ＜Ｍ１０＞【2000倍　前日／3回】
・カナメフロアブル 劇 ≪７≫【4000倍　前日／4回】
・スコア顆粒水和剤 ＜３＞【2000倍　前日／3回】
・フセキワイドフロアブル ＜５３＞ ＜Ｍ７＞【1000倍　前日／3回】

菌核病

留意事項

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

1 気温20℃前後、多湿条件で発生が多い。
2 QoI剤≪１１≫、SDHI剤≪７≫は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

1 施設栽培では換気に努める。
2 夏期たん水して、土中で越夏している菌核を腐敗させる。
3 加温栽培では、夕方早めに加温する。
4 被害株は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
5 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
・ロブラール水和剤 ＜２＞【1000倍　前日／4回】
6 発病を認めたら下記の薬剤を散布する。
・ゲッター水和剤 ＜１＞ ＜１０＞【1000～1500倍　前日／5回】
・ファンタジスタ顆粒水和剤 ≪１１≫【2000～3000倍　前日／3回】
・カナメフロアブル 劇 ≪７≫【4000倍　前日／4回】
・ピクシオDF ＜１７＞【2000倍　前日／4回】

青枯病

留意事項

1 夏期高温時に被害が多い。
2 土壌の乾湿度の差が大きいほど発生しやすい。
3 発病株に触れた収穫ばさみ等によって伝染する。

防除方法

1 なす科作物（なす、トマト、ピーマン、ばれいしょ等）の連作を避ける。
2 センチュウ類防除を徹底する。
3 排水を良好にし、過湿、過乾燥を避ける。
4 地温の上昇を防ぐため、敷きわらなどを行う。
5 被害株は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
6 抵抗性台木に接木する。
7 化学肥料等の集中的な施用を避け、なすの根を傷めないようにする。
8 発病が疑われる株の作業は最後に行う。
9 施設栽培では夏期高温時に、太陽熱利用による土壌消毒を行う。
（ⅩⅢ土壌消毒　参照）
10 本ぽを土壌消毒する。（ⅩⅢ土壌消毒　参照）
・バスアミド微粒剤、ガスタード微粒剤 劇 ＜－＞
【30kg／10a　均一に散布して土壌と混和　は種または定植21日前／1回】

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

褐色腐敗病

留意事項

1 降雨による土壌の跳ね上がりで伝染する（露地での発生が多い）。
2 QoI剤≪１１≫は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

1 なす科、うり科野菜の連作を避ける。
2 土の跳ね上がり防止のため、敷わらまたはポリフィルムでマルチングする。
3 被害株の早期発見に努め、発病した果実、枝等は直ちに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
4 排水を良好にして過湿を避ける。
5 過繁茂を避け、チッソ過多にならないようにする。
6 施設栽培では、夏期高温時に太陽熱利用による土壌消毒を行う。
（ⅩⅢ土壌消毒　参照）
7 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
・ランマンフロアブル ＜２１＞【2000倍　前日／4回】
8 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・プロポーズ顆粒水和剤 ＜Ｍ５＞ ＜４０＞【1000倍　前日／4回】
・レーバスフロアブル ＜４０＞【2000倍　前日／3回】
・ホライズンドライフロアブル ＜２７＞ ≪１１≫【2500倍　前日／3回】

褐紋病

留意事項

1 褐紋病菌に感染した採種用のなすから種子伝染する。
2 主に露地栽培の水なすで発生するが、施設栽培の水なすでも育苗期や定植後に発生することがある。
3 発病茎や果実は次作まで感染力を保持しうる。
4 QoI剤≪１１≫は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

1 褐紋病菌に感染していない健全な種子を使用する。
2 前年被害が発生したほ場での作付けを避ける。
3 土の跳ね上がり防止のため、敷わらまたはポリフィルムでマルチングする。
4 過繁茂を避け、チッソ過多にならないようにする。
5 排水や風通しを良好にし、湿度を上がりにくくする。
6 発病を確認したら柄子殻（小黒点）が作られる前に直ちに発病部位を除去し、ほ場外に持ち出し処分する。
7 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

・ベルクートフロアブル ＜Ｍ７＞【2000倍　前日／3回】
・ミギワ10フロアブル ＜５２＞【1000倍　前日／3回】
8 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・ベンレート水和剤 ＜１＞【2000倍　前日／3回】
・ファンタジスタ顆粒水和剤 ≪１１≫【2000倍　前日／3回】
・スクレアフロアブル ≪１１≫【2000倍　前日／3回】

半身萎凋病（はんしんいちょうびょう）

防除方法

1 苗床土は毎年更新する。
2 なす科作物（なす、トマト、ピーマン、ばれいしょ等）の連作を避け、なるべく田畑輪換を行う。
3 施設栽培では、夏期高温時に太陽熱利用による土壌消毒を行う。（ＸⅢ土壌消毒　参照）
4 排水を良好にする。
5 被害株は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
6 抵抗性台木に接木する。
7 本ぽを土壌消毒する。（ＸⅢ土壌消毒　参照）
・バスアミド微粒剤、ガスタード微粒剤 劇 ＜－＞
【20～30kg／10a　均一に散布して土壌と混和　は種または定植21日前／1回】
8 発病を認めたら下記の薬剤を土壌かん注する。
・ベンレート水和剤 ＜１＞
【500倍　200～300ml／株　定植後～収穫14日前／3回】または
【1000倍　400～600ml／株　定植後～収穫14日前／3回】

アザミウマ類

留意事項

1 主にミナミキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマが発生する。
2 施設内では年中発生する。ミカンキイロアザミウマは露地でも越冬が可能である。
3 ミナミキイロアザミウマは葉裏、花、幼果（へたの下）に多い。
4 ミカンキイロアザミウマは花によく集まる習性があり、水なすでの被害が多い。
5 ほ場周辺の雑草等にも生息する。
6 スワルスキー、リモニカ、ククメリスを利用する場合は、他の薬剤の影響に注意すること。（ＸⅦ参考資料　4ミツバチ・マルハナバチ・天敵に対する農薬の影響　参照）
7 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
8 モベントフロアブルの成分スピロテトラマトの総使用回数は、3回以内（但し、かん

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

注は1回以内）。

9 グレーシア乳剤は水なす、賀茂なすの果実には薬害を生じるので、使用しない。

10「キルパー」は、「適用病害虫（設定なし）」で、使用目的として、「前作の野菜類または花き類・観葉植物のアザミウマ類まん延防止」とした登録がある。使用方法は、「所定量の薬液を水で希釈し土壌表面に散布またはかん水する」。

防除方法

1 露地栽培ではほ場周辺に、施設栽培では開口部に寒冷しゃや防虫ネット（目合い0.8mm以下の赤色等）を展張し、成虫の飛来を防ぐ。

2 露地栽培では、シルバーポリフィルムでマルチングして成虫の飛来を防ぐ。

3 うね面をビニール等でマルチングし、土中で蛹化するのを防ぐ。

4 施設内やほ場周辺の除草を徹底する。

5 施設栽培では、夏期の栽培終了後、7～10日間密閉して枯死させ、残さに残る虫を餓死させる。

6 残さ処理終了後に2週間程度太陽熱消毒等を行う。（ⅩⅢ土壌消毒　参照）

7 下記の薬剤を施用する。

・モベントフロアブル ＜２３＞
【500倍　かん注（50ml／株）　育苗期後半～定植当日／1回】

・アクタラ粒剤5 ＜４Ａ＞
【ミナミキイロアザミウマ　1g／株　植穴処理　定植時／1回】
【ミカンキイロアザミウマ　2g／株　植穴処理　定植時／1回】

8 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

・アファーム乳剤 ＜６＞【2000倍　前日／2回】
・モベントフロアブル ＜２３＞【2000倍　前日／3回】
・スピノエース顆粒水和剤 ＜５＞【2500～5000倍　前日／2回】
・ファインセーブフロアブル 劇 ＜３４＞【1000～2000倍　前日／3回】

9 施設栽培では、天敵を利用する方法もある。

・スワルスキー ＜－(生)＞
【野菜類（施設栽培）　250～500ml／10a（約25000～50000頭）　放飼
発生直前～発生初期／－】
【野菜類（露地栽培）　250～500ml／10a（約25000～50000頭）　放飼
放飼後の厳冬期の月平均気温が10℃を下回る地域　発生直前～発生初期／－】

・リモニカ ＜－(生)＞
【野菜類（施設栽培）　2～4L／10a（約25000～50000頭）　放飼
発生直前～発生初期／－】

・ククメリス ＜－(生)＞
【野菜類（施設栽培）　50～100頭／株　放飼　発生初期／－】

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

10 施設栽培では、くん煙剤も有効である。（Ⅻ省力安全防除　1くん煙（1）　参照）
11 水なす、賀茂なす以外のなすには下記の農薬を散布する。
・グレーシア乳剤 ＜３０＞【2000倍　前日／2回】
12 前作の栽培終了後から残さ撤去までに、アザミウマ類のまん延防止を目的として下記の薬剤を使用する。
・キルパー ＜８Ｆ＞
【適用病害虫（設定なし）　原液として60L／10a
前作の栽培終了後から残さ撤去まで（は種または定植の15日前）／1回】

コナジラミ類

留意事項

1 オンシツコナジラミ、タバココナジラミが発生する。
2 幼虫、サナギは葉裏に寄生しているので、葉裏によくかかるように散布する。
3 スワルスキープラスを利用する場合は、他の薬剤の影響に注意すること。
（ⅩⅦ参考資料　4ミツバチ・マルハナバチ・天敵に対する農薬の影響　参照）
4 スタークル粒剤、アルバリン粒剤の成分ジノテフランの総使用回数は、3回以内（但し、育苗期の株元散布及び定植時の土壌混和は合計1回以内、散布及び定植後の株元散布は合計2回以内）。

防除方法

1 施設栽培では開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下）で展張し、成虫の飛来を防ぐ。
2 ほ場内や周辺の除草を行う。
3 下記の薬剤を施用する。
・スタークル粒剤、アルバリン粒剤 ＜４Ａ＞
【1～2g／株　株元散布　育苗期／1回】または
【1～2g／株　植穴土壌混和　定植時／1回】
【1g／株　株元散布　生育期（収穫前日）／2回】
・プリロッソ粒剤オメガ ＜２８＞【2g／株　株元散布　育苗期後半～定植時／1回】
・ベリマークSC ＜２８＞
【400株当り25ml　かん注（400株当り10～20L（1株当り25～50mL））
育苗期後半～定植当日／1回】
4 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・ディアナSC ＜５＞【2500倍　前日／2回】
・コルト顆粒水和剤 ＜９Ｂ＞【4000倍　前日／3回】
・ベストガード水溶剤 ＜４Ａ＞【1000～2000倍　前日／3回】
・アグリメック 劇 ＜６＞【500～1000倍　前日／3回】
5 施設栽培では、天敵を利用する方法（茎や枝等に吊り下げて放飼）もある。

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

・スワルスキープラス ＜－(生)＞
【野菜類（施設栽培）　100～200パック／10a（約25000～50000頭）　放飼
発生直前～発生初期／－】

アブラムシ類

留意事項

1 主にワタアブラムシ、モモアカアブラムシが発生する。
2 水なすの露地栽培では、ウイルス病が発生しやすいので、4月下旬からの有翅アブラムシ類の防除を徹底する。
3 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
4 スタークル粒剤、アルバリン粒剤の成分ジノテフランの総使用回数は、3回以内（但し、育苗期の株元散布及び定植時の土壌混和は合計1回以内、散布及び定植後の株元散布は合計2回以内）。
5 オルトラン粒剤、ジェイエース粒剤の成分アセフェートの総使用回数は1回。

防除方法

1 露地栽培では、シルバーポリフィルムでマルチングを行う。
2 施設栽培の開口部に防虫ネット（目合い0.8mm以下）を張り、侵入を防止する。
3 下記の薬剤を施用する。
・スタークル粒剤、アルバリン粒剤 ＜４Ａ＞
【1g／株　株元散布　育苗期／1回】または
【1g／株　植穴土壌混和　定植時／1回】
【1g／株　株元散布　生育期（収穫前日）／2回】
・オルトラン粒剤、ジェイエース粒剤 ＜１Ｂ＞
【3～6kg／10a（1～2g／株）　作条散布または植穴処理　定植時／1回】
・プリロッソ粒剤オメガ ＜２８＞【2g／株　株元散布　育苗期後半～定植時／1回】
4 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤 ＜４Ａ＞【3000倍　前日／2回】
・トレボン乳剤 ＜３Ａ＞【1000～2000倍　前日／3回】
・トランスフォームフロアブル ＜４Ｃ＞【2000倍　前日／2回】
・モベントフロアブル ＜２３＞【2000倍　前日／3回】
・ウララDF ＜２９＞【2000～4000倍　前日／3回】
5 施設栽培では、くん煙剤や常温煙霧剤の使用も有効である。
（Ⅻ省力安全防除　参照）

オオタバコガ

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

留意事項

1 広食性で、多くの作物を加害する。
2 早期発見に努め、若齢幼虫時に防除する。

防除方法

1 幼虫による被害が大きいので、食害痕や虫フンに注意し、捕殺に努める。
2 施設の開口部に寒冷しゃや防虫ネット（目合い4mm以下）を張り、成虫の侵入を防ぐ。
3 摘除した茎葉や果実、被害果にも、卵や若齢幼虫が付着していることがあるので、ほ場外へ持ち出し処分する。
4 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

・アニキ乳剤　＜６＞【2000倍　前日／3回】
・プレバソンフロアブル5　＜２８＞【2000倍　前日／2回】
・プレオフロアブル　＜ＵＮ＞【1000倍　前日／4回】
・スピノエース顆粒水和剤　＜５＞【5000倍　前日／2回】
・アクセルフロアブル　＜２２Ｂ＞【1000～2000倍　前日／3回】

ネキリムシ類

防除方法

1 地中の幼虫の捕殺に努める。
2 育苗期（育苗期後半）または、定植時に下記の薬剤を施用する。

・プレバソンフロアブル5　＜２８＞
【100倍　かん注（1株当り25ml）　育苗期後半～定植当日／1回】
・ベリマークSC　＜２８＞
【400株当り25ml　かん注（400株当り10～20L（1株当り25～50mL））
育苗期後半～定植当日／1回】

3 は種時または定植時に下記の薬剤を施用する。

・ダイアジノン粒剤5　＜１Ｂ＞
【4～6kg／10a　全面土壌混和または作条土壌混和　は種時または定植時／2回】

4 下記の薬剤を施用する。

・ガードベイトA　＜３Ａ＞【3kg／10a　株元散布　生育初期／3回】

ハスモンヨトウ

留意事項

1 若齢幼虫の防除に重点を置く。
2 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
3 グレーシア乳剤は水なす、賀茂なすの果実には薬害を生じるので、使用しない。

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

防除方法

1 ふ化直後～若齢幼虫時には集団で生活しているので、被害葉ごと除去する。

2 施設の開口部に寒冷しゃや防虫ネット（目合い4㎜以下）を張り、成虫の侵入を防ぐ。

3 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

・アニキ乳剤 ＜６＞【1000～2000倍　前日／3回】

・プレオフロアブル ＜ＵＮ＞【1000倍　前日／4回】

・アクセルフロアブル ＜２２Ｂ＞【1000～2000倍　前日／3回】

・ＢＴ剤 ＜１１Ａ＞（Ⅸ野菜類の病害虫防除　3野菜類　参照）

4 水なす、賀茂なす以外のなすには下記の農薬を散布する。

・グレーシア乳剤 ＜３０＞【2000倍　前日／2回】

テントウムシダマシ類

留意事項

1 幼虫、成虫ともに葉の裏から表皮を残して食害する。

2 6～7月に雨の少ない年は発生が多い。

3 コテツフロアブルは、幼苗期（1～3葉期）には薬害を生じるおそれがあるので使用しない。

防除方法

1 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

・モスピラン顆粒水溶剤 劇 ＜４Ａ＞【2000～4000倍　前日／3回】

・アディオン乳剤 ＜３Ａ＞【2000倍　前日／3回】

・コテツフロアブル 劇 ＜１３＞【2000倍　前日／4回】

・アクセルフロアブル ＜２２Ｂ＞
【ニジュウヤホシテントウ　1000～2000倍　前日／3回】

・スミチオン乳剤 ＜１Ｂ＞【1000～2000倍　前日／5回】

ハモグリバエ類

留意事項

1 マメハモグリバエ、トマトハモグリバエなどが発生する。

2 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

3 スタークル粒剤、アルバリン粒剤の成分ジノテフランの総使用回数は、3回以内（但し、育苗期の株元散布及び定植時の土壌混和は合計1回以内、散布及び定植後の株元散布は合計2回以内）。

防除方法

1 育苗期の防除を徹底し、本ぽに被害苗を持ち込まない。

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

2 施設の開口部に寒冷しゃや防虫ネット（目合い0.8mm以下）を張り、成虫の侵入を防ぐ。
3 ビニール等でマルチングし、土中で蛹化するのを防ぐ。
4 被害葉は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
5 ほ場内や周辺の除草を行う。
6 下記の薬剤を施用する。
・スタークル粒剤、アルバリン粒剤 ＜４Ａ＞
【2g／株　株元散布　育苗期／1回】または
【1～2g／株　植穴土壌混和　定植時／1回】
・ベリマークSC ＜２８＞
【400株当り25ml　かん注（400株当り10～20L（1株当り25～50mL））
育苗期後半～定植当日／1回】
7 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・ディアナSC ＜５＞【2500～5000倍　前日／2回】
・ヨーバルフロアブル ＜２８＞【2500～5000倍　前日／3回】
・ダントツ水溶剤 ＜４Ａ＞【2000～4000倍　前日／3回】
・トリガード液剤 ＜１７＞【マメハモグリバエ　1000倍　前日／3回】

ハダニ類

留意事項

1 スパイカルEXを利用する場合は、他の薬剤の影響に注意すること。（ⅩⅦ参考資料　4 ミツバチ・マルハナバチ・天敵に対する農薬の影響　参照）
2 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除方法

1 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・ダニオーテフロアブル ＜３３＞【2000倍　前日／2回】
・スターマイトフロアブル ＜２５Ａ＞【2000倍　前日／1回】
・マイトコーネフロアブル ＜２０Ｄ＞【1000倍　前日／1回】
・カネマイトフロアブル ＜２０Ｂ＞【1000～1500倍　前日／1回】
・**気門封鎖剤**＜－＞（Ⅸ野菜類の病害虫防除　3野菜類　参照）
2 施設栽培では、天敵を利用する方法もある。
・スパイカルEX ＜－(生)＞
【野菜類　100～1250ml／10a（約2000～25000頭）　放飼　発生初期／－】または
【野菜類　20～3000頭／100株　放飼　発生初期／－】
3 施設内では、くん煙剤の使用も有効である。（Ⅻ省力安全防除　1くん煙（1）　参照）

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

チャノホコリダニ

留意事項

1 幼果や新梢の先端部を集中的に加害する。

2 スワルスキープラスを利用する場合は、他の薬剤の影響に注意すること。
（ⅩⅦ参考資料　4ミツバチ・マルハナバチ・天敵に対する農薬の影響　参照）

3 コテツフロアブルは、幼苗期（1～3葉期）には薬害を生じるおそれがあるので使用しない。

防除方法

1 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

・コテツフロアブル 劇 ＜１３＞【2000倍　前日／4回】

・スターマイトフロアブル ＜２５Ａ＞【2000倍　前日／1回】

・コロマイト乳剤 ＜６＞【1500倍　前日／2回】

・カネマイトフロアブル ＜２０Ｂ＞【1000倍　前日／1回】

・サンクリスタル乳剤 ＜－＞【300～600倍　前日／－】

2 施設栽培では、天敵を利用する方法（茎や枝等に吊り下げて放飼）もある。

・スワルスキープラス ＜－(生)＞
【野菜類（施設栽培）　100～200パック／10a（約25000～50000頭）　放飼
発生直前～発生初期／－】

ネコブセンチュウ

防除方法

1 栽培終了後、被害根はていねいに除去し、ほ場外に持ち出し処分する。

2 夏期に、たん水して、生息密度を低くする。

3 本ぽを土壌消毒する。（ⅩⅢ土壌消毒　参照）

・バスアミド微粒剤、ガスタード微粒剤 劇 ＜８Ｆ＞
【20～30kg／10a　均一に散布して土壌と混和　は種または定植21日前／1回】

4 下記の薬剤を施用する。

・ネマトリンエース粒剤 ＜１Ｂ＞
【15～20kg／10a　全面土壌混和　定植前／1回】

・ネマキック粒剤 ＜１Ｂ＞
【15～20kg／10a　全面土壌混和　定植前／1回】

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。